

# 社会科より見た国語科単元学習批判

- 向山嘉章『カリキュラム中心問題としての単元の研究』 -

黒川 孝広

## はじめに

### 国語科と他教科との関係

国語教育史を研究する上では、教育学の研究成果を参考にすることがある。それは、国語教育学が教育学を前提に成立しているからである。そして、国語科の内容を検討すると、そこには他教科と関連する内容が多い。「読む」ことや「書く」こと、「聞く」ことや「話す」ことなどは、他教科でも指導する内容である。また、国語科でもその内容が経済や自然わたると、社会科や理科の範囲を指導することになる。このように、国語科と他教科では内容の一部に重なるところがある。ただ、国語科での経済や自然について指導するのと、他教科の指導とでは、指導内容が異なる。例えば、内容の深化という面が、理解と表現の深化という面かという点である。もし、内容の深化について他教科から言及されれば、その指導の不十分さは否定できない。しかし、理解と表現の深化という部分には国語科の指導に専門性があると言ってもよいであろう。

これら内容が重複する起源は、明治初期からの一つの教科書で数教科の内容を取り扱ったことにある。当時、一つの読本に社会の内容、理科の内容などが収められていて、それら教材を読むことで指導していた。そこには、文章を「読む」ことに教育の基本があったといえよう。

ならば、国語科の教育内容が他教科を侵犯しているのではなく、教育学の上の部分に国語科の内容があり、その上部分として社会科や理科などの他教科が存在していることになる。このような構造になるのは、国語科が全ての教科の基礎である「言語」を扱い、すべての教科は指導の過程において「言語」を使用するならば、国語科は必然として全ての教科の基盤の一部となるからである。

もちろん、国語科が社会科や理科などの全ての基盤として存在するのではなく、一部が基盤としているのに過ぎない。そして、その基盤になっていない本質の所が国語科の存在理由である。ここで、この論拠を持って、国語科は基礎教養指導としてことばの使い方だけに限

定めておきたい。前述の通り、理解は含まない。それは、国語科の基盤である言語教育の目的が言語使用の改革（思考や発想を中心とする）であり、そして、自らの「言語生活」の伸長であるからである。単にことばの使い方ならば、それは学校教育、社会教育、家庭教育の基盤の問題であり、国語科の問題ではない。

教科としての国語科、あるいは国語を扱う国語教育として存在するならば、そこには、第二言語習得としての言語修得過程に沿って教育活動をするのではなく、第一言語としての使用（思考や発想を中心とする）にある。ここに国語科は、他教科と関連しつつ、独自として教科を存在させる意義があることになる。

## 他教科からの検討の必要性

国語科は社会科、理科などの一部を内包する部分集合として存在するのであれば、他教科から見た国語科という存在をもう一度確認する必要がある。社会科が代表される他教科の視点は、国語教育の一部を含むものであり、それゆえに社会科と国語科との間にある差異が、国語科の独自性を確認する好材料となるのである。いわば、「比較教科教育学」なるものが存在することが、教育構造をより明確にしてくことになり、そのことを確立する前に歴史的に安定してきた教科構造を大きく変えることは、その独自性を崩すことになる。それは、教育学としての存在を変えることであり、単にその場しのぎで行ってはならないものである。

## 単元学習と国語科

戦後に成立した社会科は、戦前には一部の学校にはあったが、全国的には教科として存在していなかった。よって、その存在意義を確立するために教育内容と教育方法、教科の独自性を至急に検討する必要がある。地理や歴史以外の要素を取り入れ、そして社会全般の総合的な教科として設立された社会科にとって、教科の独自性確立は、その存在意義をかけ急がれることであった。その急がれた確立のためには、単元学習の導入が必須であった。そして、その単元学習と、国民学校時の「郷土の学習」とが融合して社会科が成立したと見るのが妥当である。C I E の指導の元に昭和22年9月<sup>(1)</sup>より本格的に導入した社会科の単元学習と、他教科の単元学習を比較することで、単元学習の本質を検討することが出来る。国語科では戦後数年の後に単元学習の流行が終焉を迎えた。その理由を考えるには、他教科との違いを考察する必要がある。

今回、この資料が社会科からの視点で国語科教育を検討しているので、国語科教育の本質を検討するには適当な文献である。

## 向山嘉章の分析

向山嘉章の生没年は未詳。大正3年、豊島師範卒。青柳小学校に赴任。昭和4年、青柳小学校より転出。4月26日に『訓導十五年 遍路の後』（郁文書院）を刊行。その中で国語教育についても執筆している。昭和20年、伝達講習を受けて、新教育の在り方についての研究を深める。昭和21年、文部省初等教育課の幹旋でCIEのヘレン・ヘファナン女史について社会科の指導を受ける。昭和22年、8月より「小学校経営指南」の編集に携わる。（昭和24年2月に「小学校経営の手引」（文部省）として刊行）昭和23年、9月に「小学校社会科指導要領補説」（文部省）の編集に参加。

本資料刊行時は、築地近くの小学校の校長をしていた。

## 国語科単元学習批判

向山嘉章は雑誌『国語教育』（大正10年6月号、10月号）に綴方教育についての案を発表している。当時青柳小学校訓導であり、修身、国語等に関心があった。今回の記事では、批判というには大げさであるが、国語科の単元学習について問題点を指摘しているという点で、国語教育史での資料的価値は大きいと言える。

### 第十章 各科の単元論

#### 一、国語の単元学習

〔資料p.5〕国語科の独自性について、「国語指導要領」の附録から検討し、国語教育の内容について検討したもの。

倉沢栄吉氏の場合、

〔資料p.9〕倉沢氏の場合は、教材単元と経験カリキュラムとを「単元学習」と呼んでいるとし、そこに混乱があると指摘する。よって、倉沢氏の論からは「単元学習」の概念は捉え得ないとする。

大橋富貴子の説

〔資料p.12〕大橋氏は、生活単元と教材単元とで混乱していることを指摘する。

〔資料 p . 1 6 〕小島氏は無難であり、正当であるとする。

## 二、単元の性格

〔資料 p . 1 8 〕単元学習について、社会科では作業単元であるとし、その構造の枠を整理したもの。

## 五、単元学習の混乱をどうする。

〔資料 p . 2 7 〕教科枠内での学習か、生活体験学習かという点から、単元学習について考察を述べている。

## 本資料からの問題点

本資料からうかがえる問題点を挙げる。

### [ 国語科の独自性 ]

社会科から見ると、国語科の内容は、言語事項に徹すればよいと考えられやすいこと。

社会科の独自性を維持するには、国語科の内容と重複する部分についてを整理する必要があること。

国語科が単語や文というレベルの知識理解だけでないことを説明し、国語科の独自性を一般にも理解させるような方法が今後必要になること。

### [ 国語科の単元学習 ]

単元学習の語の内容についての混乱を他教科を含めてより広く考察する必要があること。

単元学習の混乱や衰退の原因を、国語科の教科構造から検討を加えること。

国語科の教科構造から見て、向山の分類とは違った国語科独自の単元学習論の分類を設定し、それに当てはめないと矛盾が生じること。

## 注

- (1) 最初4月より実施の予定であったが、「第一学年より第十学年までの総合的に扱われる一般社会科の学習はその性質上九月まで延引する」(各府県知事宛、文部省通牒)となった。すでに昭和21年より実験的に社会科を設置した学校があり、特に川口市では市長と助役(梅根悟)によって市内の教員を集め、9月に社会科委員会が発足し、昭和22年3月に都立九段高校の研究会で川口案として発表した。